
MonsterHunter.Connection

スクラムアイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Monster Hunter・Connection

【Nコード】

N0471L

【作者名】

スクラムアイス

【あらすじ】

世界は広い。その世界では各地に強力なモンスターが生息し、様々な大自然がある。そのモンスターを独特な狩猟技術で屈服させ、生活の糧にする職業「ハンター」その「ハンター」になったある記憶喪失の少年のお話。その広い世界で起こった小さな物語。

広すぎる世界（前書き）

こんばんは。スクラムアイズです。

オリジナル設定があったりするのは次回の本編からです。

今回はモンスターハンターの世界についての紹介です。

広すぎる世界

この世界は広い。人間が住むには広すぎる世界。

様々な生物の源となる川、草原、森がある広大な【森と丘】

青々と木が茂る広大な熱帯地域【密林】

昼と夜。暑さと寒さ。残酷な二面を見せる【砂漠】

霧が立ち込める湿地帯【沼地】

生命が生きようとするのを妨げるように溶岩が吹き出る【火山】

生命が住まうのに困難な寒冷地域【雪山】

鬱蒼と広がる木、植物によって視界が遮られる自然の迷路【樹海】

強風が吹きつけ、特殊な植物が生息する荒地【渓谷】

古代の遺跡、かつての文明の跡地【塔】

そしてこの世界には様々な【モンスター】が生息する。

獣人種 牙獣種 鳥竜種 甲殻種 魚竜種 飛竜種
古龍種

彼らは人間の害になり糧になる生物たち。この世界に影響を与え、この世界が影響を与えてきた生物。

様々な顔を見せるこの世界。この物語はこの世界のほんの端で起こった出来事。

この広すぎる世界のなかで生きた、モンスターハンターの物語。

広すぎる世界（後書き）

これから本編を更新していくのでよろしくお願ひします。
内容は p2g と mh f がメインです

物語の始まり (前書き)

今回から本編始まりました。ちょっとだけオリジナル要素も混ぜます。

物語の始まり

目が覚めた。

部屋の窓から見える景色はすっかり闇に落ちていた。

(僕は・・・ベッドで寝ているのか?)

少年はベッドで寝ている。彼の外見、髪の色は白く肩くらいまでかかるストレートだ。

それに対し血が滲んでいるように紅い目は美しくどこか神々しいが、まだ幼いように見える

(ここは、どこだ? 思い出せない)
体をゆっくり起こす。

(僕の寝ているベッドの近くに・・・女性か?)

彼のベッドの近くには椅子があり、そこに女性が座っていた。

「気がついた?」

「・・・あ」

「ここは・・・どこですか?」

「私の家」

そう言ったのは白いボブヘアの似合うまだ若い女性。この家は奥にキッチン、寝室と居間が一つになっている家だ。この家はなかなか広く、不自由なく暮らせそうだ。

「ああ、貴方は雪山で倒れていたのよ」

「え?」

数日前の雪山にて・・・

(銀シャリ草も取れたし、早く移動しないとモンスターに遭遇しそ
うだから帰ろうかな)

女性はそう思いながら村へ帰還しようとしていた。その矢先に

「ズシン、ズシン」

モンスターの足音だ。

【雪山】

銀シャリ草、氷結晶を特産としている雪山は極寒の地。

銀シャリ草とは極寒でしか育たない植物で銀色をしていて米に似て
いる植物だ。

氷結晶は長い年月冷やされた氷の塊。

モンスターもその気候に対応しているものが多い。

氷結液を吐き出し、獲物を捕らえる肉食獣の鳥竜種、【ギアノス】

あつたかい毛皮はその周辺の村の衣服に使われている草食種の【ポポ】

だが、その足音は【ギアノス】【ポポ】には当てはまらない。

その足音はある程度の暑さ寒さに耐えられ

退化した翼と圧倒的な攻撃力、スピードをもつ絶対強者の飛竜種、

轟竜【ティガレックス】だ。

そこは雪山の山頂、通称エリア8。

人々はハンターが活動する狩場をエリアに区分し分かりやすいようにしている。

地図にはエリアの番号が振られており、エリアを覚えてない新米ハンターなどに地図は必須だ。

そのエリア8に抜け穴があるのだがその付近で女性は銀シャリ草を採集していた。

そこにティガレックスが現れ、どうエリア8を抜け出そうか悩んでいる。当然人間よりモンスターのほうが強い。徐々に足音が近くなる。そつと息を殺して通り過ぎるのを待つ。

・・・どうやらエリア8の隣にあるエリア6に移動したようだ

麓に近いエリア6から逃げることにした。

エリア6に入った。

麓に下りようと歩いていたら

白髪の紅い目をした少年が倒れていた。

そして放っておいても死ぬだろうと思いい、少年を村に連れて帰ったのだ。

と言う話を女性は少年にした。

「ちょっと待ってください。僕はそんな所で倒れていたんですか？」

「そうよ」

ちよつとまった。何かおかしい。僕に考える時間をくれ。少年はそう思った。

だが、女性は質問してくる。

「貴方、名前は？」

「名前ですか、たしか・・・タカヤだと思えます」

少年の名前はタカヤ。体には凍傷などの怪我をしている。その名前を聞いた女性は

「タカヤ・・・」

「どうしました？」

「何も無いわ」

そしてもう一度、女性は続けて質問した。

「なんであんなとこで倒れてたの？」

「分かりません・・・」

雪山は狩猟地区。凶悪なモンスターが居るのに一般人なんか入れるわけ無い。なのにそこで倒れていたと言うことはこの少年はハンターなのか？一般人だったら何か理由があるに違いない。それが知りたくて彼女はさらに質問した。

「分かる範囲でいいから詳しく話を聞かせてくれないかしら？」

「い、いやちょっと僕に考える時間をください。何だこの感じは・・・」

少年は考え始めた。

そして急に

「うそだろ・・・」

彼の顔はかなり深刻そうなもだった。そして今にも泣き出しそう。そんな顔だ。

「どうしたの？」

少年は頭を抱えこついった。

「多分・・・ですが、僕は・・・」

・・・数時間後

「どうですか？分かりましたか？」

「うーん。つまり今は何も思い出せないのね」

「そうです」

「なるほど・・・」

もう一つ何か思い出そうとしてタカヤは首をかしげ悩む。だが、まだ怪我也治っていない。それにもう夜だ。彼にはゆっくり休んでもらい、また明日話を聞くことにしたようだ。

「まあ分からないことも分かることもこれから考えていったらどう

かな？今日はもう寝なさい

「zzzz」

「もう寝てるか」

少年は寝息をかきながら眠りについていた

次の朝・・・

タカヤが起きたら女性は部屋の椅子に座りコーヒーを飲み、奥にあるキッチンで謎の動物が食事を作っていた。

「お、起きたね。タカヤ」

「はい、おはようございます」

「この子は食事を作ってくれるキッチン【アイルー】のミーシャよ

「よろしくごちやー」

「あ、よろしくお願ひします」

謎の動物、こと獣人族の【アイルー】は高い知能を保有し二足歩行をする。その知能は人と会話するほどあるが人ほど高くは無い。稀に人より優れた知能を持つアイルーも居るらしいが、本当に居るのかは不明である。

【アイルー】のミーシャは簡単に挨拶するとまた忙しそうにキッチンに戻っていった。

「タカヤ、昨夜はよく寝れた？」

「はい」

目覚めているタカヤの顔を見て女性はにっこり笑った

「それはよかった。まだ弱っていると思うから、もうちょっと休んでてね？」

「わかりました」

「そういえばあなたの名前は？」

女性は口に含むと手にかけてコーヒーを机に戻し答えた。

「エイダよ」

「エイダさんですね」

「んー、エイダさんじゃなくてエイダでいいわよ」

「じゃあエイダ」

女性は、ん〜、と悩むような顔をした。

「エイダって呼び捨てもなんか微妙ねえ・・・」

エイダは本格的に悩みだした。

エイダ様、エイダちゃん、エイダっち、姉御、

そう口に出しているエイダを見てタカヤは苦笑いしている。

「あー！」

何かひらめいたようにそう言った。
だが、

「い、いやなんでもないわ」

何を言おうとしたのか分からないがエイダは躊躇したようだった。

「もう呼び捨てにしていよいよ。」

「分かりました」

「もうすぐ朝ご飯の時間だけど食べる？」

「たべます」

タカヤはそう答えると

「敬語はだめよ」

エイダはそういうと人差し指を立てて口の前に持ってきた。

「たべるよ」

「そうそう」

そういう会話をしている間にミーシャがテーブルに食事を運んできた。

「よし座ってね。でわ、イタダキマス」

エイダがそう言って手をあわせた。それを見たタカヤは疑問を抱いた。タカヤは疑問を抱いた。それに気づいたエイダは、

「ああ、「イタダキマス」って言うのはハンターの基本でね、ご飯が食べれる事を有難く思うことを忘れないために言う言葉なの。まあ普通の職業やってる人は分かんないんだろっけどね」

『イタダキマス』は恐らくだいぶ昔からある言葉ではないだろうか？と科学者たちは語る。

何故ハンターがこれを使っているのかは不明だが旧人類の職業『竜に立ち向かう人々』が語り継ぎ、今に至っているのだろう。

『竜に立ち向かう人々』とは初代のハンターのようなものだ。モンスターに対し人類は逃げ惑うことしか出来なかったが『竜に立ち向かう人々』が竜を倒すことを可能にしたことで今の文明が成り立っているのだろう。

一部の科学者は古代文明から『イタダキマス』は存在していると語るが、多くの科学者はそれを否定する。

古代文明とは現在の文明より前の文明だ。その文明は非常に発達しており、古代の武器は強力なものが数多く存在する。

（ということはエイダはハンターなのか？）

「エイダはハンターなの？」

「うん」

なるほどそれだったら分かる。部屋の隅に存在している刀の意味がそういうことは覚えているんだ、僕。とタカヤは心の中でつぶやいた。

「この村を守る？」

「そうだよ、その話はおいとしてとりあえず飯をたべましょう」

「タカヤも言うのよ？イタダキマス」

「はい、イタダキマス」

二人はテーブルに用意された食事を食べ始めた。ハンターの女性エイダは食べるが記憶喪失の少年タカヤはエイダほど食べない。いや食べれない。エイダ分の大量に用意された食事に対しタカヤの分はそれに比べると全然無い。エイダはハンターだから当然なんだろう。それをエイダはいとも簡単に平らげたのに対しタカヤは随分と苦戦しているようだ。そしてエイダは完食から少し休んで

「ちょっと仕事行ってくるから、部屋で休んでね」

「ありが・・・」

礼を言いかけたところにエイダが

「あとそれから食べた後は「ゴチソウサマデシタ」だからね。これも「イタダキマス」と一緒の意味で食べ終わった時に使うのよ。もう時間だから行くね、じゃあ」

エイダは別室で白色の防具に着替え足早に家を出て行った。家に残されたのはミーシャとタカヤだけだった。

その夜・・・

「エイダー居るかー？」

人の声がエイダ宅に響いた。男性の声だった。その男性はこちらに気づきエイダの居場所を尋ねた

「お仕事と言って出て行きましたよ？朝くらいに」

「そうか。じゃあここで待たせてもらっぞ」

男性は玄関の近くに用意されていた椅子に腰掛けるとベッドに座っ

ているタカヤに声をかけた。

タカヤは一日中寝ていた。凍傷がまだ治りきってない。そして一日中考えていた。

これからどうするのか。

あのエイダって言う人はどんな人なのだろうか。

それと

自分はどんな人間なのだろうか？

そんなことをぼんやり考えているときに

「お前、名前はなんていうんだ？」

「タカヤです」

男性が聞いてきた。

「タカヤか。気分は落ち着いたか？」

この人も僕のことを気にしてくれる。この村の人はいい人なのだろうか。

タカヤはそんな事を思い男性に答えた。

「はい。お蔭様で落ち着きました。ところでやっぱりエイダが僕を連れて来たんですか？」

「そつだぞ。お前をエイダが連れ込んだときは村中で騒いだんだぞ」
この男性は見た目より言動のほうが若い。外見は30くらいか。それに今着ている服、恐らくハンターの防具だ。彼はハンターなのだろう。と、タカヤは推理した。

「そう言えば村長さんに挨拶とかしないと」

タカヤが立ち上がるうとすると

「駄目だ。あんなところで倒れてたのに休まず動こうとするなんて馬鹿のすることだぞ。それに村長はもう寝ている」

タカヤは、そうかと言うようにベッドに座った。

「あらカルロス、もう来てたの？」

玄関からエイダの声がする。

「遅いぞ、この時間に待ち合わせるって言ってたじゃねえか」

「いめんいめん」

エイダは別室に入って着替え始めた。

・・・数分後彼女が別室から出てきたとき普通の布で作り上げた衣服。いわゆる普段着を着ていた。

「えーつとりあえずご飯たべようかな。ミーシャ3人分のご飯お願いね」

「分かったにや。えーっとハンター2人に病人1人かにや」

そう言うとミーシャはキッチンに入ってしまった。

「すまねえな、俺の分まで」

「大丈夫よ。そんなことより、今日は明日の打ち合わせよ」

「ああ」

(どうやら2人は何処かへ行くのだろう。2人ともハンターだと言
うしクエストをこなしにでも行くのか?)

クエスト。それはハンターに舞い込んでくる依頼のことだ。ハンタ
ーは前払いで契約金を出し、その依頼を受注する。無事達成できた
らその契約金は返ってきて、報酬金も貰えるが、失敗したらその報
酬金は依頼者のものとなる。それがクエストの仕組みだ。どうやら
2人は集中して話し合っているようだ。そして1時間後、打ち合わ
せが終わったようだ。

「旦那様、ご飯が出来ましたニヤ」

「よし、丁度いいし食べましょうか」

「『イタダキマス』」

「「ゴチソウサマデシタ」「

「じゃあまた明日」

「ああ」

食事を終えカルロスは家へ帰っていった。

「タカヤ、明日もクエストに行つて来るからお留守番頼むわよ」

まだ食べ終わつてないタカヤにエイダは話しかけた。

「でもその間村のハンターが居ませんよ?」

「大丈夫、他の村のハンターが守ってくれることになってるから」

エイダはそう答えると

「じゃあ私は銭湯に行つて来るから、食べたらず先に寝ててね。」

「はい」

バタン、と音がした。

「もう食べれないや」

「だめニヤ残さず食べるニヤ」

タカヤの近くにミーシャが寄ってきてそう言った。

「なんでエイダはあんなに僕の面倒を見るんでしょうか」

「本人に聞くと良いニヤ」

タカヤは考えた。

（あたたかい布団。おいしいご飯。そして優しい人たち。僕はここにいて良いんだろうか。ずっと居ていたら迷惑になるんじゃないか。そういうことを聞いておけばよかった。）

「ゴチソウサマデシタ」

タカヤは食べ終わった食器を積み重ねた。

「あ、それは私がやっておくニヤ」

ミーシャがテーブルにあった食器を全部持って行ってしまった。

タカヤは床に入った。

（とにかく明日、これからのことをエイダと話そう。そうしなければ始まらない）

タカヤは眠りについてしまった。

物語の始まり (後書き)

はい、混ざりましたねオリジナル要素。

『竜に立ち向かう人々』って^^;;...そのまますぎる^^.....
.....

モンハンってこの地球の未来の話らしいんで、イタダキマス登場させてもいいかなと思いました。

間違っていたり、おかしいところを指摘していただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0471/>

MonsterHunter.Connection

2010年11月12日11時27分発行